

ニューノーマル時代における 小児診療の考え方

川崎医科大学小児科学講座 主任教授

尾内一信 先生



COVID-19 が小児診療に与えた影響

—まず、2019年のCOVID-19流行発生以降における小児診療の現状を教えてください。

COVID-19は、2019年12月に武漢で原因不明の肺炎が報告されて以降、2020年1月には頻りにマスクミ報道されるようになり、2月に入るといよいよダイヤモンド・プリンセス号の乗客で感染確認され、連日大騒動となったのは記憶に新しいところです。

新型のウイルスということで情報が錯綜する中、徐々に新しいことがわかってきたのは良かったのですが、一方で患者さんに大きな恐怖心をもたらす事態となりました。さらに政府が不要不急の外出自粛を呼びかけてからは、これは小児医療に限ったことではありませんが、患者さんがいっきに受診を控えるようになったのも事実です。

それに伴い、予防接種の接種率にも変化が生じています。1歳までの乳児における接種率に大きな変化は認められませんが、1歳を超えた接種率は20%程度、減少しました¹⁾。

1歳未満の乳児は生まれてからすぐに健診を受け、同時に予防接種を済ませますが、1歳以降は接種する期間に幅があります。そのため、保護者の中では「できればちょっと先に延ばそう」という意識が働いたのではないのでしょうか。いまだ接種控えの状況に変化はなく、その動向は注視していくべきと考えています。

—COVID-19が感染症全体にもたらした影響はありますか。

COVID-19への感染対策の実施は、インフルエンザをはじめ、すべての感染症に大きな影響をもたらしたと推測されます。

接触感染対策、飛沫感染対策として「3密を避けよう」「マスクをしよう」「手洗いしよう」が奨励され、3密対策の一環として、換気への配慮も行われるようになりました。その結果、2019/2020シーズンのインフルエンザの流行は、例年の約4分の1にまで抑えられています(図1)²⁾。インフルエンザ以外にも、RSウイルスやロタウイルス感染症、多くの呼吸器感染症も例年と比較して大幅な流行抑制となっているようです。

つまり、COVID-19への恐怖心からの受診控えに加え、多くの感染症への罹患が抑えられていることで、全体的に受診者が減少しているのが現在の小児診療の現状と言えます。

COVID-19 への感染対策について

—COVID-19のウイルス特性を踏まえた、感染対策のポイントを教えてください。

COVID-19の感染経路としては、現在、接触感染、飛沫感染、さらにエアロゾル(空気中を漂う微粒子)による感染も指摘されています。